

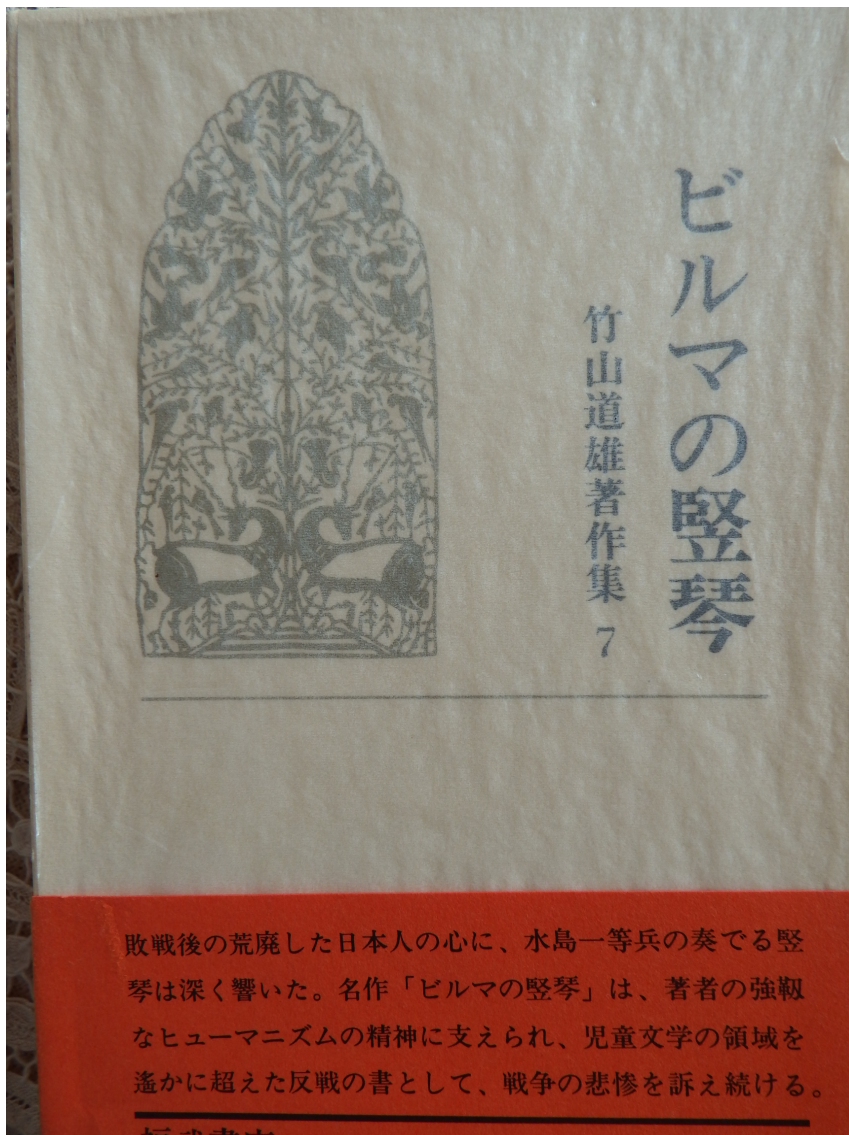
第30回 絶滅危惧種「強靱なヒューマニズム」とは？

I T 生

ちかごろ、ようやく入手した「竹山道雄著作集」（昭和58年、福武書店）。

竹山さんは、今では、ほぼ絶滅した感のある「旧制高校時代の教養主義者」であり、左傾化した戦後の焼け跡において、保守（自由）主義の論客であった。

そのうちの一巻に「ビルマの豎琴」がある。ふとなにげに本の帯をみると、今となっては「檄文」ともいえる一文がつづられている。—著者の強靱なヒューマニズムの精神に支えられ…。とある。



本書の帯の文句に注目！

なぜ、この一文に反応したかという、映画「ハクソーリッジ」をみたからである。この映画は、太平洋戦争の末期、米国の兵役に志願したクリスチャンの若者の話。

彼は、田舎育ちゆえに、体力はある。訓練でも身体能力はずばぬけていた。しかしながら、殺生はしたくないと決して銃をとらない。何度か、上官と衝突し、軍法会議にかけられるのだが、結局主張が認められ、衛生兵として、沖縄戦の上陸作戦に参加する。米軍は日本兵の反撃に手を焼き、作戦はことごとく失敗する。艦砲射撃のもと米兵は突撃するが、決死の日本兵に全く歯が立たない。その、遺体が散乱する地獄のような戦場を、件の若者は銃をもたず、負傷兵に駆け寄る。味方が一時撤退したあとも、ひとり戦場に残り、負傷兵を、直立するがけ下にロープでひとりずつ下ろし、約80人の人命救助を成し遂げる。

この功績がみとめられ、良心的兵役拒否者としてははじめて、名誉勲章を受ける。若者は、鉢合わせした日本兵すら助ける。これは実話である。

この若者の行動を評して、「強靱なヒューマニズム」といわずして、何といおうか。まさに、ビルマの豎琴の水島上等兵なのだ。若者の行動は、自己犠牲とか、平和主義といった陳腐な言葉で表せられない、もっと深淵なものである。戦争で崩れかけた、人間社会をまるで、ひとりで支えているかのような印象を覚える。

自然と人間との距離感も、畏怖と繁栄のはざまで、どう強靱なヒューマニズムを発揮するかどうかが問われる—と、寺田寅彦師もいうのだ、と私は解釈している。

(2018年1月)